



京都市で第40回記念大会 九州外で初の開催



レンガ造りの水路橋「水路閣」(京都市左京区南禅寺福地町) 琵琶湖疎水の一部として1890(明治23)年竣工、橋幅4.06m、橋長93.17m

改元により5月から「令和元年」となった2019年。日本の石橋を守る会は40回目となる記念大会を同月12日(日)・13日(月)の2日間、京都市で開催した。九州外での大会開催は初めて。

1日目は京都市国際交流会館の研修室を会場に通常総会や記念講演、活動報告などを行い、会員など58人が参加。その後、徒歩で「南禅寺水路閣」や「蹴上インクライン橋梁(ねじりまんぼ)」を見学し、同会場内のレストランに場所を移して夕食を兼ねた懇親会・意見交換会を開催した。2日目は現地石橋見学会が行われ、京都府亀岡市篠町の「王子橋」や京都市東山区五条橋東の大谷本願内の「円通橋」などを訪れた。

第40回大会プログラム

【1日目(5月12日)】

開会宣言 末永暢雄副会長

会長挨拶(代読) 河村修副会長

通常総会 議長 大塚光二理事

次回大会予告

記念講演「アーチ石橋に魅せられて」

片寄俊相談役

活動報告 中村秀樹・調査研究部長、

尾上一哉・技術部長、宮川康夫・会員(資料による報告)

現地見学会1 「南禅寺水路閣」「ね

じりまんぼ」など(案内役・亀岡市篠

町自治会の岡野宗忠氏)



会場となった京都市国際交流会館

写真提供/中村まさあき

【2日目(5月13日)】

現地見学会2 「王子橋」案内役

・自治会の中井康雄会長、岡野宗

忠氏、「円通橋」

来年の大会は福岡・八女市で

5月24日(日)・25日(月)開催に

総会の最後に来年度の大会開催地を福岡県八女市と発表。「八女上陽の『ひふみよ橋』を守る会」の小井手恒則氏と内田理絵氏が、「八女市上陽町を流れる星野川に架かる4橋のアーチ『ひふみよ橋』のうち、来年は2連アーチの「寄口橋」が架橋100周年を迎えます。そこで来年は、そのお祝いに大会を開催したいと思います。ぜひ来年は、上陽町にいらしてください」と、次回大会への意気込みを語った。

その後、開催日は5月24日(日)・25日(月)と決まった。(広報部)

※2面に続く

中面の案内

2面 第40回大会で片寄相談役が記念講演
5面 再び動き出した通潤橋保存修理事業

4面 大分・院内町で石橋を発見
6面 「中国の古橋」撮影記その2(榊 晃弘)

通常総会の後、片寄俊秀・相談役（第2代会長）による記念講演が行われた。以下にその要旨を紹介する。

「アーチ石橋に魅せられて」

私は1970年、長崎市の長崎造船大学（現・長崎総合科学大学）の教員として長崎に赴任しました。そこで中島川にずらりと架かる「石橋群」を見て、びっくりしまして、長崎にはすごい宝があると思いました。当時の中島川は「どぶ川」で、悪臭を放つておったのですが、それでも水面にアーチを映す姿は美しかったです。石橋は昔からずっと長崎の人々の生活を支えてきたのだなと思えてきて、その健全な美しさと強さの魅力にどっぷりとはまってしまいました。



第2代会長を務めた片寄俊秀・相談役

は5万人もの人出でにぎわい、大成功。今では中島川沿いが、四季折々のまつりの名所となっています。

石橋を訪ね世界各地へ

やがて私は、アーチ石橋について調べたくなり、日本全国、フランス、ドイツ、イタリア、中国、韓国などを訪ねました。その中でもいつも頭にあつたのは、長崎の「眼鏡橋」によく似た「そっくりさん」を探すことでした。眼鏡橋を実測して

分かったのですが、川の流れる方向に対し直角ではな

石橋から川の蘇生、まちづくりへ めがね橋通し、世の中を見詰める

く、やや斜めに架かっているのです。築造には高度な

技術が必要だったはずで

眼鏡橋築造の技術にはポルトガル伝来説もありますが、1634年に架けられたとされているので、明末の中国から伝わったのだらうと思ひ、中国に行きました。蘇州では「玉潤橋」を遠くから見て、そっくりさんを見つけたと思つたのですが、近くに行くと石の積み方が全く違いました。

写真家の榊晃弘さんにもお願いし、「中国の古橋」（花乱社）取材に際し、

眼鏡橋のそっくりさん探しを依頼したのですが、見つからなかったようです。

その後、フランスのマドン川に架かるスタニスラス橋が鹿児島市の甲突川に架かつていた「武之橋」によく似ていることを発見しました。武之橋は「甲突川五石橋」の一つでしたが、1993年の集中豪雨で壊れ、撤去されてしまいました。大変残念でした。五石橋の中では「西田橋」は特に立派で、そのまま世界の石橋と比較しても引けをとらないものでしたが、これを移設するというのが、何とか現地に保存でき

石橋から川の蘇生、まちづくりへと私の研究テーマは発展していきました。それは、めがね橋を通して世の中を見詰める活動と言えます。それを教えてくれたのが、本会の創設者で初代事務局長の山口祐造さんでした。

最初に会つた瞬間から、この人は大物だと思いました。凄腕の土木技術者で、話もうまいし、人間的に魅力がある。反骨の人ですが、周囲の人にはやさしかったです。「石橋は長い目で見るとエコノミーだし、魅力的で町の風格を上げる」と言っていました。山口さんが80歳で亡くなる前年、私は兵庫県の関西学院大学に移つていたのですが、その私に、あなたが次の事務局長兼会長だと、山口さんから会の資料一式が送られてきました。自分は今もう長くない、後はよろしく頼むというのです。それでやむなく、第2代会長を引き受けたのです。

今回、「アーチ石橋に魅せられて」日本の石橋・世界の石橋 石橋から川の蘇生、そしてまちづくりへ（A4版、カラー、72ページ）をまとめました。懐かしい京都で、私のこれまでを振り返ることができて大変ありがたく思います。

わが師・山口祐造さん

1982年の長崎大水害とその復旧・復興については、2017年11月に熊本県の山都町で開催された「全国石橋サミット」で話しました（会報92号で紹介）。眼鏡橋の現地保存の実現は、河川行政の転換点になったと思います。

※「アーチ石橋に魅せられて」片寄俊秀著を希望の会員は、氏名・住所・TELを明記の上、メールか郵便で申し込みを。料金は1500円（税送料込み）。代金は冊子に同封の郵便振替用紙を使い、到着後1週間以内にお振り込みください。
▷kaiker@sribashi-ranorukai.jp ▷TEL 090-13513 熊本県上益城郡山都町下市182-12 潤橋史料館内「日本の石橋を守る会」事務局宛

第40回大会 現地見学会

京都に残るアーチ

写真提供/中村まさあき



王子橋 (通称・めがね橋)。京都府亀岡市篠町王子、1884(明治17)年架橋、径間約25㍍、橋幅約5.5㍍。橋の設計は琵琶湖疎水の工事主任を務めた田辺朔郎。土木学会推奨土木遺産



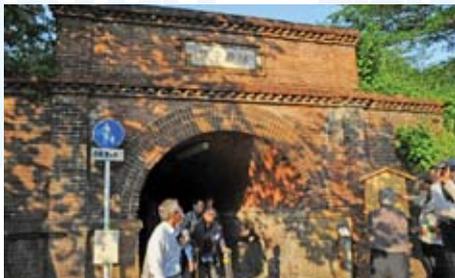
王子橋の輪石と壁石は「夫婦天端(めおとてんば)」と呼ばれる珍しい構造。石材は花崗岩

王子橋

上流にコンクリート製の新橋が架かると、旧橋(王子橋)には家庭ごみなどが不法に投棄されるようになったという。そのため、亀岡市篠町自治会(中井康雄会長)のメンバーが中心となり、15年前から毎月1回、清掃作業を行っている。

ねじりまんぼ(蹴上インクライン橋梁)

人道トンネル「まんぼ」は、上部に敷設されたインクライン(船を運ぶための軌道)と斜めに交差する。内壁のレンガが斜めに巻かれ、ねじれているように見えることから「ねじりまんぼ」と呼ばれる。



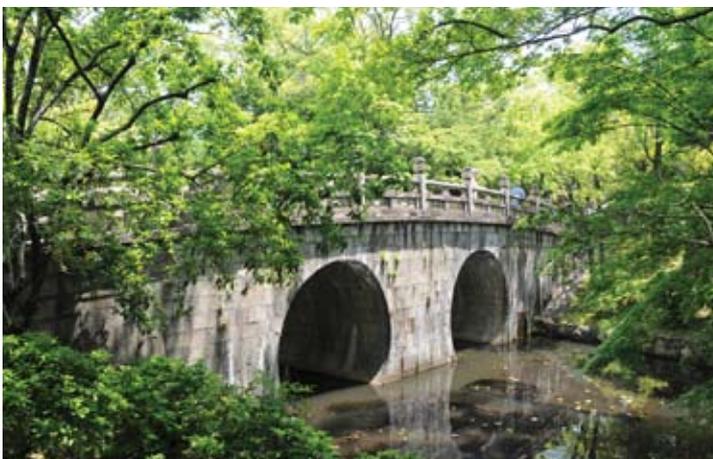
ねじりまんぼの西口。「雄観奇想」(意味・見事な眺めと優れた考え)の扁額が掲げられている



王子橋のたもとで記念撮影

円通橋

浄土真宗の開祖・親鸞聖人の廟所「大谷本廟」(通称・西大谷)境内の蓮池「皓月池(こうげついけ)」に架かる石橋。



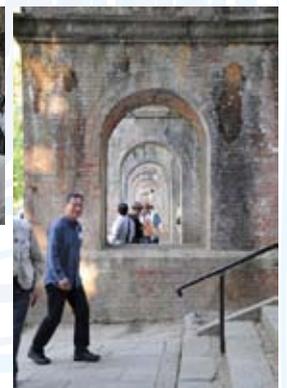
上) 円通橋 (通称・めがね橋)。京都市東山区五条橋東(大谷本廟内)、1856(安政3)年架橋、橋幅約6㍍、橋長約24㍍。真円のトンネルを2つ連ねたアーチが特徴的。石材には花崗岩を使用
左) 高欄には円筒形の手すり石や逆蓮(ぎゃくれん)柱、格狭間(こうざま)などの意匠が施されている

南禅寺水路閣

南禅寺の境内を通る琵琶湖疎水の一部をなす延長93.17㍍のレンガ製水路橋。アーチ構造が採用され、デザイン性にも優れている。西洋の土木技術が日本に導入されて間もない当時、田辺朔郎が設計し、日本人の手で築造された。



水路閣(京都市左京区南禅寺福地町)前で、ガイドの岡野宗忠さん(亀岡市篠町自治会・町歴史づくり推進会)の説明を聞く参加者



水路閣は橋脚内にもアーチが施されている

森川孝一会員 熊本・玉名市で石橋写真展



森川孝一会員

会場の「たまな創生館」

2017年に「豊岡のめがね橋を守る会」を立ち上げた森川孝一会員（熊本県）が本年5月2日〜13日の期間、熊本県玉名市で石橋写真展を開催した。会場となった「橋本一郎記念たまな創生館」（熊本県玉名市滑石536）内のギャラリーには、これまで森川会員が撮影した玉名市と熊本県北部に現存する石橋の写真が展示され、石橋に関する豊富な資料と共にパソコンで石橋の動画なども紹介された。「現存する石橋の存在を広く知ってもらえればと思います」と森川会員は写真展開催の動機を語った。

玉名市は、2019年のNHK大河ドラマ「いだてん」の主人公の一人、金栗四三（かなぐりししろう）ゆかりの地。ドラマのシーンにはたびたび石橋が登場することから、会場ではその石橋についての解説資料も展示されていた。（広報部）

大分県宇佐市内町

新発見で石橋が計79橋に

2017年5月に本会の第38回大会を開催した大分県宇佐市内町。「日本の石橋群」を標榜する同町で近年、新たに石橋が見つかり、同町の石橋の数は、アーチ橋66橋を含む79橋となった。（広報部）

見つかったアーチ橋は「兎谷渡（おせだにわたり）橋」（別名・兎谷川渡橋、同市同町小野川内兎谷）で、本会の賛田岳和・資料整理部長がすでに第38回大会直後、現地確認を行っていた。場所は、宇佐別府道路・院内インターチェンジから国道387号を南下し、県道664号を通って西へ約6キロ先の鹿嵐茶屋入口三叉路バス停で南へ左折、50ほど先の農免道路地下の暗き内。



市道地下の暗きよの一部となっている「兎谷川渡橋」
写真提供/賛田岳和



海を渡って日本に渡来する「アサギマダラ」
写真提供/院内石橋群景観保全協議会

賛田氏は、上流側から兎谷川に降り、暗きよを進んだ先で径間1.7メートル、幅1.87メートルの同橋を確認した。架設年は1903（明治36）年とされている。

同橋の発見に対し院内石橋群景観保全協議会の向野茂（むくの・しげる）副会長は、「院内町の石橋群は、先人たちの血と汗と知恵の結晶です。小さな石橋も含め、石橋を未来につなげていくことは、私たちに課せられた責務と想っています」とコメントを寄せる。

同町では観光客や地元小学生に対する石橋巡りなどのボランティアガイド活動をはじめ、海を渡って日本列島へ飛来する渡りチョウ「アサギマダラ」を観察できるようにしようと、石橋の周辺や学校に同チョウが好む野草「フジバカマ」の植栽を行っている。現存する石橋群を生かし、行政と民間が連携した取り組みが行われているようだ。

熊本・山都町で公開討論会

「通潤橋の今と未来」考える

復旧工事が動き出した「通潤橋」（熊本県上益城郡山都町）の現状と未来について考える公開討論会が8月24日、山都町立図書館ホールで開催された。主催は一般社団法人石橋伝統技術保存協会（同町、尾上一哉理事長、本会技術部長）。通潤橋の3次元測量を担当した計測リサーチコンサルタントの西村正三氏（広島市）が基調講演を行い、その後に討論会が行われた。

討論会には西村氏や山尾敏孝熊本大学名誉教授、町教育長、石工技術者や住民の代表などが参加。「調査結果を含めて十分な情報公開を」「放水以外の通潤橋の価値アピールを」「来年3月末までの完成は難しいのでは」などの意見が出た。（広報部） ※5面に関連記事



討論会はコーディネーターの進行でパネラー6人（壇上）が意見を述べ、アドバイザーとして町議会議員や町商工会関係者、町行政関係者ら4人（左側）も加わり、討議内容についてコメントした
写真提供/中村まさあき

国指定重要文化財「通潤橋」―熊本・山都町 再び動き出した保存修理事業

昨年5月の大雨によって壁石の一部が崩落した国指定重要文化財の「通潤橋」(熊本県上益城郡山都町)。修復の範囲や工法など多方面から検討が行われ、保存修理工事が動き出した。崩落によってあらわになった通水石管下の構造にも注目が集まっている。(広報部)

写真提供/中村まさあき



あらわになった通潤橋の裏築(うらつき)。上に並ぶ四角い石が通水石管で、その直下に板状の敷石が並ぶ。裏築には多くの大きな石が使用される中、敷石の下の一部には丸い小さな小石「円礫(えんれき)」も見られる



現場見学会で説明を受ける参加者=8月13日



右岸上流側に作業用の足場が設置された通潤橋

壁石内側の構造があらわに

2016(平成28)年4月、熊本地震により被災した「通潤橋」は、今年3月完成を目指して復旧工事が行われたが、昨年5月7日の大雨により、右岸上流側の壁石の一部が崩落した。崩落は長さ約10m、高さ約5mにわたる。その後、崩落箇所をモルタルで覆うなどの応急処置が施され、崩落した93石のうち92石が回収された。各石材は、3次元計測などを経て元の位置が特定されたが、損傷の激しい石材もあるため、補修や新材使用について検討が行われている。

これまで、修理の方法や工程などについて、学識経験者や技術者、地元代表者らによる各種の専門部会が繰り返し開かれていた。昨年11月には各部会の委員が集まる、「通潤橋保存活用検討委員会」(事務局・山都町教育委員会)が開催され、新たな保存修理事業の実施を国に申請し、今年2月に交付が決定。3月に地元の(株)尾上建設と工事請負契約が結ばれ、工事の準備が始まった。5月には右岸上流側に足場を設置、6月に崩落箇所の被覆モルタルが取り外され、通水石管下の「裏築(うらつき)」と呼ばれる壁石内側があらわとなった。

上塚会長らが山都町を訪問

学識経験者や石工技術者などによる調査や工法の検討が進められる中、本会

の上塚尚孝会長と河村修副会長、甲斐利幸相談役など7人が6月7日、山都町の梅田穰町長を訪問した。上塚会長らは工事に關する一層の情報開示などを要望。それに対し梅田町長は、「通潤橋は町の観光の核であり、地元経済に影響が大きい。保存修理工事は町の最重要課題として全力で取り組んでいく」と応じた。

山都町が現場見学会を開催

8月13日には山都町主催の現場見学会が開催された。通水石管下の裏築の構造が明らかになったのは1854年の架橋以来とあって、見学会には親子連れなど町内外から多くの人々が訪れ、同町教育委員会の学芸員から説明を聞いた。

山都町教育委員会の資料によると、通潤橋の裏築には次の特徴がある。▽城郭石垣の裏込めに使用される小さな「グリ石」ではなく、かなり大きな石(壁石や通水石管より強度が低い石)が使用されている▽石管に近い上部では丸い小石「円礫(えんれき)」を使って高さの調整が行われている▽石管の真下には板状の石が敷き並べられ、その敷石の上下には赤土が使用されている。

工事は、右岸側の通水石管約30石を一度取り外し、裏築を安定させながら壁石を積み直し、再び通水石管を設置する計画である。工事の完了は来年3月末を目指している。

八代市東陽石匠館Ⅱ熊本県 新館長に上塚寿朗氏が就任

上塚寿朗(熊本県)



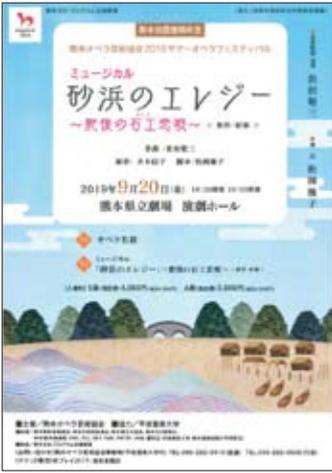
東陽石匠館の上塚寿朗館長

今年6月に、熊本県八代市東陽町にある、石工とめがね橋の博物館である東陽石匠館の館長に就任しました。

東陽町は熊本を代表する石工集団である種山石工の発祥の地です。館内にはめがね橋関係の資料のほかにも、当時の石工の仕様の様子が分かるジオラマや石材を運ぶ知恵を体感できる施設などがあります。建物の外壁は石積みで、多くのめがね橋にも用いられている溶結凝灰岩で出来ています。また周辺には多くのめがね橋が架かっています。近くにおいでの際にはぜひ、石匠館までお越しください。

石工の物語がミュージカルに 熊本県立劇場で初演

熊本県上益城郡御船町の平成音楽大
学内に事務局を置く「熊本才へら芸術協
会」(出田敬三会長)は、熊本地震復興祈
念事業として9月20日、石工を主人公と



した新作ミュージカル「砂浜のエレジー〜肥後の石工恋歌〜」を熊本県立劇場(熊本中央区大江)で初演する。江戸時代後半、地震と津波によって最愛の人を失った肥後の石工、林蔵が悲しみを乗り越えようとする姿がヒロインとの恋模様を交えて描かれる。

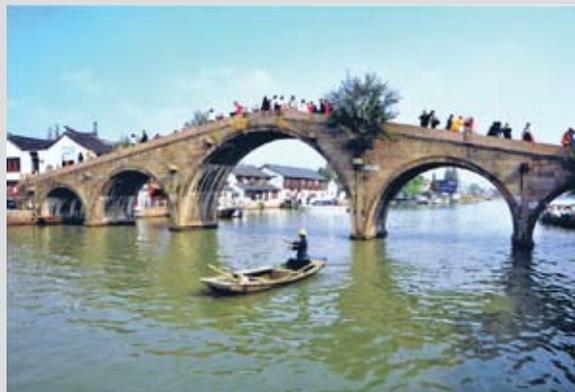
作曲と芸術監督・指揮は出田会長(同大学学長)。原作とナレーションは熊本県在住作家の古木信子。脚本と演出は熊本の劇団「ゼロソー」の松岡優子。林蔵役は歌手の下司愉宇起、ヒロイン役はソプラノの赤池優。公演は午後7時開演。S席4000円(当日4500円)。同協会事務局 ☎096(282)6910。

中国で5万6000キロ移動

「よし、自分の目で中国の橋の世界を確かめてみよう」。夢のような話である。いつの時代に、どこに、どんな橋が造られたかを知りたいと思い、中国の橋に関する入手可能な文献を取り寄せた。しかし、橋の全体像を知るには不十分だった。そんなとき、片寄秀

「中国の古橋」撮影記 その2

榊 晃弘 (福岡県)



休日の放生橋は観光客があふれていた
=2010年11月、中国・上海市朱家角鎮
写真提供/榊 晃弘

は無理なので、1回の取材日程は2週間。中国・上海空港を起点に現地へは飛行機、新幹線、夜行列車を利用し、その先はレンタカーを使った。

最初は上海から地理的に近い浙江省、江蘇省を回った。そして順次、内陸部の湖南省、湖北省を経て東北地方の遼寧省、北京市、河北省へ…。さらに



浙江省杭州市で撮影中の榊晃弘氏

りだったが、吊り橋や風雨橋なども歴史的に重要であることが分かったので取材リストに加えた。全ての撮影を終えてから取材ノートを見たところ、移動距離は中国国内だけでおよそ5万6000キロ。これは地球一周をはるかに超えており、中国大陸の広大さを実感させられた。取材道中記は次号に書く予定。

予定していた10回の取材を終えたのは、2014年4月下旬。当初の計画では、長崎眼鏡橋のルーツを探る目的で、中国の古い石橋だけを撮るつもりだったが、吊り橋や風雨橋なども歴史的に重要であることが分かったので取材リストに加えた。全ての撮影を終えてから取材ノートを見たところ、移動距離は中国国内だけでおよそ5万6000

俊元会長からいただいた「中国古橋技術史」(北京出版社)はありがたかった。「行きたい、見たい、撮りたい」と、思いは募った。そして、ついに2010年3月初旬、念願の中国へと出発した。中国を知る人から、「各地に点在する古橋を外国人が一人で探すのは不可能」と言われ、ガイドを同伴した。長期滞在

三五郎は

八面六臂か(青春)

江戸時代の熊本藩では、八代地方の行政区画は八代町、種山・野津・高田手永の1町3手永※に分かれていた。その中で最も高名だった石工は、野津石工・宇七の二男の三五郎(1793-11寛政5年、西野津生まれ。野津地区は現・八代郡氷川町)だった。三五郎は20歳代、上益城郡甲佐町を流れる緑川の鶴ノ瀬堰(うのせぜき)や糸田堰の築造、薩摩堰(氷川町)の補修工事などで腕を磨いていた。

肥後初の石造水路橋を築造

文化年間の終わりが、当時の砥用(ともち)手永(現・下益城郡美里町)は、村を流れる柏川(かしわごう)から取水するかんがい水路の整備を企画したが、その一部に谷をまたぐ難所があり、そこに肥後で初となる石造水路橋を架設する必要が生じた。そこで、手永の行政責任者だった惣庄屋の三隅丈八は、その架設工事を三五郎に依頼。1818(文政元)年に水路橋「雄亀滝橋(おけだきばし)」が完成した(永青文庫所蔵の古文書「町在」No.1327より)。そのことはすでに会報92号で紹介

している。

八代地方では1600年代初頭から、遠浅の海を活用した干拓事業が活発に行われた。干拓による農地の拡張に伴い、従来の谷水だけでは農業用水が不足するため、球磨川から取水する新たな水路「麓川用水路」が計画された。



単アーチ橋が16基現存していて、そのうち現・氷川町にあった「馬之神谷橋」「六地藏谷橋」「松之本橋」の3基は、2筋の用水路が立体交差する構造の「水吐懸越(みずはきかけこし)」だった(同「町在」No.1424より)。これら三五郎が造ったと思われる麓川用水路の目鑑

三五郎はこの事業にも呼ばれ、沈砂池造りや目鑑橋架設などに活躍した。

さらにその傍ら、1824(文政7)年には、現在の上益城郡嘉島町を流れる御船川に「六嘉大堰樋門(ろつかおおせきひもん)」をこしらえている。

麓川用水路には、1962年5月の時点では石造

橋群は、惜しいことに、1969(昭和44)年の水路拡張工事に伴って全てが撤去されてしまい、現在は残っていない。

ちなみに、麓川用水路は先で大鞘川(おおざやかわ)に注ぎ、大鞘川は八代市鏡町両出と同市千丁町古閑出付近の干拓地「四百町新地」を流れる。そこには、干拓のときに造られた石造の「大鞘樋門群」(熊本県指定史跡)が現存するけれど、三五郎との関係は不詳。

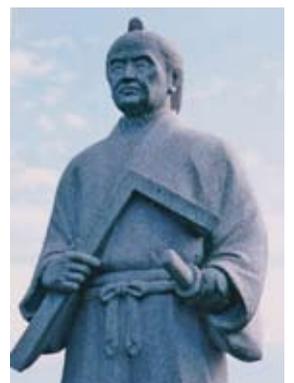
「苗字御免」の身分に

1821(文政4)年には干拓によって、四百町新地の隣に「七百町新地」が造成された。現在の国道338号の新大鞘橋辺りからは大鞘川の右岸に、鍵型の石灰岩の堤防が見えるが、これは三五郎が築いた堤防であると語り継がれている。

この七百町新地工事で書き落とせな



麓川用水路に架かっていた六地藏谷橋 = 1962年、上塚尚孝撮影



墓所に立つ岩永三五郎の石造

いのは、三五郎はこのときの工事中に限り「苗字御免」の身分となり、熊本藩から「岩永」姓を名乗ることを許されたこと。さらに、惣庄屋・鹿子木量平(かのこぎ・りょうへい)から八代郡代への上申により、1830(文政13)年3月から終身で苗字御免となる(同「町在」No.1424より)。

岩永三五郎の墓は、現在の八代市鏡町鏡村にあり、その基礎石には、門弟の名が刻され、種山石工の「外助」「外市」兄弟の名も読み取れる。その事実から、野津石工と種山石工の技術交流がうかがわれる。

墓地には三五郎を顕彰しようと有志が寄贈した石像が立つ。その像をじっくり見詰めていると、6本の腕「六臂(ろっぴ)」を持つ、奈良・興福寺の阿修羅像に重なる見え、堰や用水路、目鑑橋架設などにわたる岩永三五郎の手腕を彷彿させる。

(2019年7月25日記、次号に続く)

※手永とは、江戸時代の大名、細川家独自の行政制度。郡より狭く村より広い行政区画で、その行政の長が惣庄屋

おもいででの石橋



加藤元昭(和歌山県)

1976(昭和51)年の夏、今西祐行の小説「肥後の石工」を読んで石橋ファンになった知人らと、33歳だった私は6日間の日程で長崎市を訪ねた。そのとき、強烈に印象に残ったのは、現川(うつつがわ)町で見た小藤橋と屋敷橋だった。壁石にも輪石にも、丸く不ぞろいな自然石が使われているのに、それで崩落しないのが不思議だった。そのとき撮った写真が見つからず、残念である。

長崎市街地では、中島川石橋群に感動

石橋の声に耳澄ませたい

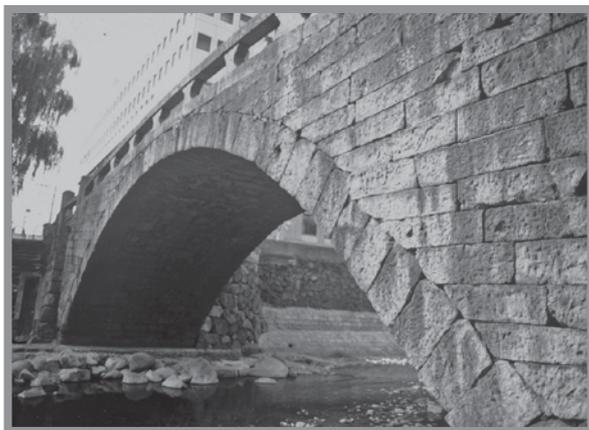
田上あけみ(熊本県)

私は、熊本県宇城市松橋町の山あいに生まれ育ちました。周辺には、たくさん石橋があります。子ども頃から山歩きをしながら、石橋を見て回るのが好きでした。

石橋のどこに魅力を感じるかというと、大小を問わず、武骨ながらも盤石(ばんじゃく)な強さ、凜(りん)としたたたずまい、そして姿の美しさ…、何もかもが「胸キュン」ポイントです。

結婚後はしばらく、忙しく動けませんでしたが、20年ほど前から石橋ウォッチ

懐かしい長崎の石橋群



長崎市諏訪町の旧・東新橋
1976年、加藤元昭撮影

ングを再開しました。そのきっかけになったのは、熊本県内の石橋を紹介した本「熊本の石橋313」(熊本日日新聞社)との出会いでした。

それから、「県内全石橋の踏破」を目標に掲げています。それは私にとつて大きな目標なので、まだ達成には至りませんが、今ではライフワークのようになっています。

石橋を前にじっと耳を澄ますと、当時の石工さんたちの息づかい、さらには声までもが聞こえてくるようです。そのことを夫に話すと、彼は苦笑しますが、私はこれからも一基一基を丁寧に訪ね、架設時に思いをはせたいと思っています。

した。江戸時代に架けられた14橋ものアーチ石橋が残っていて、その姿は壮観だった。古い技術で造られた橋の石積みと、美しいアーチに魅了された。

1980年に日本の石橋を守る会が発足すると、私は幹事の一人となった。その2年後に長崎大水害が発生。現川の石橋は全て流失し、中島川では6橋が流失、眼鏡橋など3橋も被害を受けた。その後、石橋を大切に思う人たちの運動が実り、東新橋など、流失した中島川の4橋は「昭和の石橋」として再建された。

それは喜ばしいことだったが、橋の姿は旧橋とだいぶ印象が違つ。やはり、以前の姿にはかなわないと思つ。

私の石橋ウォッチングはまだまだ続きます。



「石貫車橋」熊本県玉名市石貫、橋幅1.9m、径間5.03m
写真提供/田上あけみ

編集後記

8面に「おもいででの橋」コーナーを設けました。写真は復元される前の東新橋の姿。昔日の石橋の姿と共に石橋の関する個人的な思い出を知ることも、石橋文化を大切にすることにつながるのではないかと思います。

(会報担当・中村まさあき)

募集しています!

「おもいででの石橋」写真と原稿

流失、撤去、移設された石橋などの現存時の写真を募集しています。石橋に関する当時の思い出と共に原稿(4600字程度)をお寄せください。写真は必ず返却いたします。問い合わせや投稿は左記事務局の中村まさあき宛。

▷koho@ishibashi-mamorukai.jp

日本の石橋を守る会

～石橋とその文化を大切に～

会報95号(通算) 2019(令和元)年9月14日発行

代表者 会長 上塚 尚孝
事務局 〒861-3513 熊本県上益城郡山都町下市182-2
通潤橋史料館内 ☎0967(72)3360
HP <http://www.ishibashi-mamorukai.jp>
BBS <http://9328.teacup.com/jsbp/bbs/>